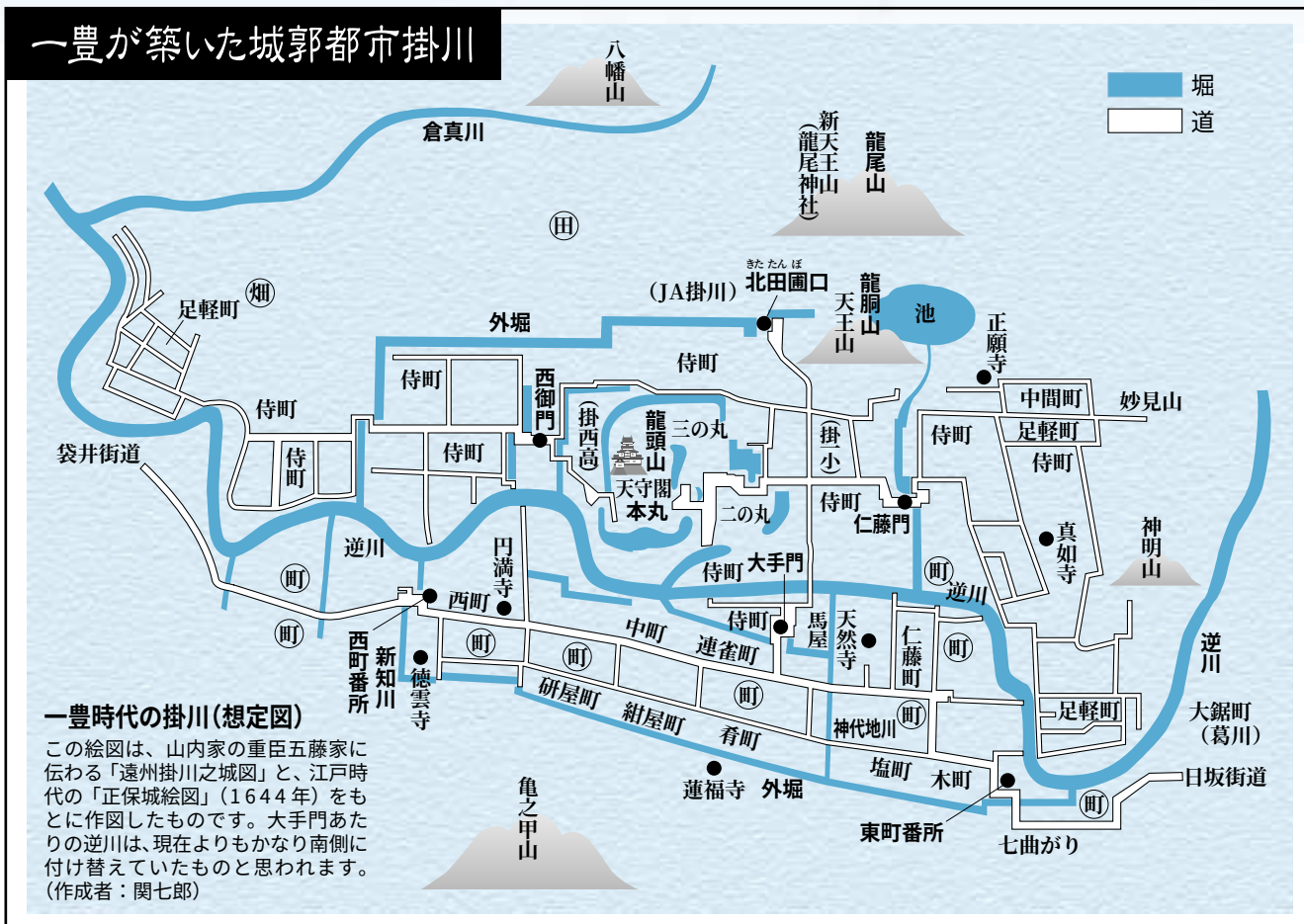


織田信長、豊臣秀吉、徳川家康に仕えた戦国武将

# 一豊と掛川

その2

## 一豊が築いた城郭都市掛川



### 一豊時代の掛川(想定図)

この絵図は、山内家の重臣五藤家に伝わる「遠州掛川之城図」と、江戸時代の「正保城絵図」(1644年)をもとに作図したものです。大手門あたりの逆川は、現在よりもかなり南側に付け替えていたものと思われます。(作成者：関七郎)

## ◆城郭都市の建設

掛川に着任した一豊は、関東の徳川に対する防衛を配慮し、市街地全体を堀で包む城郭都市造りに着手します。本丸を置く龍頭山と掛川古城の龍洞山、北方の龍尾山の三山を軸に、市中を貫流する逆川、支流の神代地川・新知川・北側の倉真川・初馬川などの天然の河川を利用した堀をめぐらし、城の周りには内堀を浚渫しました。慶長2年(1597)に堀を浚渫した記録があり、このとき円満寺が現在の場所に移されています。町の両側には、境堀を設けて城外と区画し、外堀の内側に土塁を築き、町の入り口には木戸・番所を置いて町の防備を固めました。工事には、家臣の侍や領民の夫役を募って参加させました。築城に従事した御普請方頭取や、鍛冶頭、大鋸頭、壁塗方などは土佐に転封のとき高知へ随従しましたが、大工頭の土屋五四郎は領内に残り、笠屋町に屋敷を与えられ永く大工頭として仕えました。

## ◆今川氏の遺臣を家臣として召し抱える

近江長浜二万石から掛川五万石に加増され、知行高の増大に伴い軍役も増えたので、それに必要な家臣を新規に採用しました。今川氏滅亡後そのまま土着し、帰農していた遺臣を召し抱えています。土佐へ移るとき一豊の家臣は175人ですが、その内の半分近くの81人

が、掛川において召し抱えられた武士で、その後の土佐藩では、「掛川衆」と呼ばれ活躍しました。

一豊が計画した城と町は、東西2km・南北1.8kmあり、全体の完成までには至りませんでしたが、このときの町割りが現在の城周辺の町並みになっています。

(監修：掛川市郷土研究会連絡協議会)

「掛川城の絵図展」を報徳図書館にて開催しています。(4月27日まで)

### 【研屋町の外堀跡】



一豊から江戸初期(1590~1630年ごろ)の記録では深さ2.7m・幅7.2mの外堀がありました。